

特118

57

未だ根本に目醒めざるか

震災後に處す可き國民の覺悟

菅 沼 豊 著

国立国会図書館



始



未だ根本に目醒めざるか

—— 震災後に處す可き國民の覺悟 ——

皇命會主幹

菅

沼

豊





未だ根本に目醒めざるか

——震災後に處す可き國民の覺悟——

菅 沼 豊

殘燭の如く而して幽久に

大正十一年六月十四日神木氏著人格政治の基礎が發行さるゝの日、政友會の高橋内閣は慘落して、超然内閣の加藤内閣が成立した、吾人は加藤内閣に對してより多くの期待を有したけれど、名は超然内閣であつたが、實は俗の俗たる内閣で、この空前の時局に處す程の器量が、前加藤首相に缺如せるを觀破し、大正十二年七月二十五日發行、「いのち」誌上に於て、最後の申言をなすと共に、内閣總理大臣以下閣僚に切腹を誨めの記事を掲ぐるや、前加藤首相は間もなく薨去し、閣僚は總辭職の止むなき状態に至つた、故に吾人は同志上八月二十五日發行の論説に、速に皇命の會を開きて萬姓保善の道を樹立す可きを説く、是は實に山本權兵衛氏が舉國一致内閣説を提出して、世の視線を注集するの先驅をなした。

又本年四月二十五日發行の誌上には、「克く今の間に自覺したが良い。吾輩は大風が樹を折り、洪水が地を洗ふやうなことがあつて、人畜が斃るゝことあるとも、その小なる犠牲によりて、天地萬物に新たなる活命を與へらるゝことを知る時に、天災の意義を見出すことが出来る」と述べ「天災の意義を説明し、「若し東京市が灰燼となり、或は富豪征伐の暴舉が起つたり、何十萬と謂ふ人間が失はれても、以洲戦亂に三千萬の人間の殺傷されたのに比すれば、其の災害は小である」云々と説明して、難局に處するの覺悟を教へ、同五月二十五日發行の誌上には、「政治家か官公吏か泥棒か、——和面歐魂と稱す——雲

影の如き變化——偽坊主の斷末魔——西洋思想の本來相——東西兩想の槍舞臺——命に由り憲政の賊を葬る——眞の政治の意義——歴史は人間罪惡の叙述なり——血の雨と火の川」と謂ふ名目の下に、眞劍に國民の自覺を促し、神木鷗津氏は天下の青年に望むの題下に、深刻なる論文を寄せられた。

吾人が有ゆる方面に於て國民に與へたる覺悟は徒爾ならず、九月一日午前十一時五十八分果して大地震は襲來した、天地も搖けと許りに、天津祝詞を宣り上げて居る吾人には、決してそれが俄然でもなく突然でもないやうに思はれた。吾輩は是に就いて思ひ出すことがある、それは恰も本年一月十四日神木鷗津氏の主宰する書斷社の發會祝賀の日、予は招かれて席に列し、當日の餘興、及神木氏の演説、(氏の演説は今日は人心改造の時期なりと題し三月號に掲載した)等あり、支那人が手品を演じて居る時可なり強烈なる地震があつて、皆が顔の色を代へたこと、それから抽籤になつて予が十八番の籤に當り、皇命會の主張を引き當て景品は人心改造に因みて、人蔘海草(混布)を得たことである、神木氏はそれを顧みて、して見ると人心改造は何處迄も貴下の使命だと附言したことであるが、考へて見ると命の自覺、世界人心の大改造が、如何に危険なる場面と道筋に、如何に微弱なる人間の口から叫ばれて居たか、吾人はその偽はらざる眞面目なる努力に綿々として盡きぬ幽久なる生命を認めることが出来る。併し是迄の人間は、多くは、殘燭の如く細々に、たゞ命脈を繋いで來た者と見へ、政黨も、宗派も、その代表者も古い古い頭の權化様の役目をして來たに過ぎない。萬事がビクビク者であつたことを立證して居る。

權兵衛爺と新平翁の運命

然るに時代は一變した、即ち素盞鳴神が、大地を踏み鳴らし、天上高天原に舞ひ登り玉ひしが如く、鐵腕宰相山本權兵衛伯は、九月一日の大震災を、兩の足に跨げて、大命を拜し、同月二日親任式を舉げ

た、その女房役たる鬢髻後藤新平子が、吾々老人は割合に進んで居る、普選は吾々の手で即時斷行すると言つて、所謂新しがり屋をアツと言はせた所は、慥かに一新せる現代人の代表と見て貫祿は十二分で幾等が餘の御利益も手傳つて居る。

兎に角に吾人の直感は、是迄眞星に適中して居る。即ち九月一日は、命の切替へ時と知つて、その手續を踏み、九、十、二ヶ月は其の洗濯期間として休刊したが、又茲に新たなる氣組を以て、豫め權兵衛爺と新平翁の運命を説き、相共に人生の目的に進まなければならぬことになつた。

吾人の觀る所を以てせば、山本首相は、現代の豪傑で、後藤内相はその才器である、之れにカンニングな犬養老、周到な田男、綿密な平沼、山之内と謂強兵が揃つた内閣であるから、今度の内閣は慥かに豪傑内閣の名に悖らない。だが世に豪傑の出る時は碌な時ではないので、豪傑内閣の運命も、略是によりて推すことが出来る。換言すれば豪傑は力を以て立つが故に、その力を要しない時が來て意苦地なく亡ぶるのである。従つて豪傑には通有の病弊が附纏つて居る。そしてその病弊は知らず識らずの間に何の位ひ世を毒すか知れない。古來豪傑は随分出たが何れも是れも、幽久に難有い仕事を遺しては居ぬやうに思はれる。

強がりの權兵衛伯よお聞召給へ、九月一日震災の第一日の夜であつた吾人は上野公園西郷翁の銅像下に避難し、嘗て誌上に書いた血の雨と火の川の實現を見たが、寢卷姿の西郷サンの銅像も、銅振ひ一つせずに燃へ擴がる東京市を眺めて居た。此時銅像は吾人に教へた、オイドンが勝サンと談判した時、勝サンは此の美事な町を灰燼するのは惜しい、何うか之れを兵燹より脱せしめたいと語つた全く江戸は東照神君の建設する所、徳川の舊臣として最後の忠節を思ふ勝サンが、之を保存したいとの希望は最もと思つた、今になつて見ると、家康公の徳も亡び、その東照宮の名も有名無實となり、かく大自然の憎む所となり、廢墟の如く東京は灰燼になりつゝあるのをオイドンは寢卷姿で見んけりやならぬ云々と、西

郷ドンの感想は着身着儘で逃げ出した吾人には、成程と思はせるものがあつた。

若し徳川氏が、自己の勢力を以て、日光東照宮を築いたのであり、國民全體が誠を捧げて造營したものでないとするれば、關東の鎮守、日光大権現の御利益を疑はざるを得ないのみならず、神名を私にし、徳川は道を傳れる神職僧侶の先達の如く然りである。多くの豪傑は皆な如斯鐵腕を振ひ、憎む可き手振りを遣し居つたるぞ、彼等は勢力のなき者の言には聞かないのみならず、出来る丈け弱い者は虐げて來て居る。併し國民は方に目醒めなければならなくなつた。人間の力は大自然の威力に殆んど無抵抗であることを目の當り経験した吾人は、彼等豪傑の仲間が、自己の都合よき者の言に聞き、單に世の人氣策を講じ、復興の再建のと騒いだ所で、さう／＼豪傑に瞞着されることは出来ない。吾人は國民の自覺が彌深刻になるに伴れて、自然豪傑内閣は不人望を暴露して倒れる運命に在ると、信ずる。たゞ刮目すべきは權兵衛伯と新平子の運命が如何に自然の前に展開されるかである。それは人間は限りなく不完全であることが限りなく完徳である所以で、此意味に於て決して宿命的ではない、生き生きて死なず、在り在りて失せず、幽現に貫き、古今に亘るの活力を有する者であるからだ、力を頼む豪傑内閣は、必ず國民の不人望の前に脆くも崩壊すると雖も、予は權兵衛伯や後藤子がそれと共に没落するとは謂はぬ、爺翁たるもの宜しく、その低きに聞く徳を養ひ眞に天業を扶翼し、恢張し得るや否や、如何に、?

根本の問題を逸するな

吾人は近頃發表された後藤子の復興の精神を讀んで共鳴し得る多くの者を見出して居る、けれども、それは歸せずして似て居ると云ふ丈けで、吾人は後藤氏より訓育を受けたこともなく、又自分に後藤氏に申言した譯でもない、勿論年齢も相違し、教育程度も異り、境遇も違つて居る吾人が考へて居る所と後藤氏の説と酷似して居る筈がある譯はないが、それが似て居るのに不思議のない理由がある、夏が來

る、温度が高まる、そうすると老人も、小供も薄物を着るやうに、同時代に住み、苟しくも其時代に生きて行かうとする吾等の思想が、同じ軌道を歩みつゝあるのに何の疑があらう。世の進運に逆行し、夏が來ても、冬が來ても、同じ衣物で行かうとする者は、其人が如何に若からうと、新參だらうと、吾人は共鳴することが出来る、つまり彼等は夏冬同一の衣物で行かうとする古き思想の禽獸である、動物であるのだ、吾人は後藤氏の復興の精神が、單なる復興でないことを聞いて、會心の笑を洩さず居られない。吾人は過去數年に於て何れ丈け叫んだらう。昔の聖人の生れ代りとか、高僧の再來とか、そんな者が何程澤山出て來ても、それは人生に何も新たな意義を持來たものでない、私には一燈圖の先生や、川面の先達さん等の行爲を感心はするけれど、何うも然る氣分になれない、まづと積極的に行つて下さる生神様を要求する、酒を呑まぬとか、煙草を呑まぬとか、それが人生進歩の上に餘程の自慢の如く考へられるやうでは、吝臭くて天で問題にならぬと謂ふのは後藤子の心も吾人の精神も變りはない言分だらう。曾て本田某が後藤子を東京市に訪ひ、熱心に日蓮主義を説いた所が、後藤子は俺に何程そんなことを説いた所で、俺は外道だぞ、の一喝を浴びて本田某がスゴ／＼引下つた相だが、成程昔高德ではあつたにもせよ、一個人の限りある過去の人物を拜むやうなことでは、今日復興院の總裁にはなれない。

凡そ宇宙の眞理は、聰明の前に公開されてあつて、それを皇命と言ふのである、故に人苟も公明の心を以て其總てを判する時は、正邪も、曲直も明白の名に副ふ可く自ら氷解し得らるゝに相違ない、何程天理教のおみき婆さんが、此者の病を救ふと思ふても、此者に救はる可き者がなかつたら仕方ないことで、一個人が如何に偉大であり、高德であつても、女を男にすることも出来ず、たゞ自然に従つて行くより外はないから、天理だとか、神理だとか、責任を廻避する名辭が必要だ。その限りなき不完全な一個人を限りなく賞め立てる信者は、無智で、盲目で、非道に落ちて居るのである。重ねて云ふ宇宙の眞理は

聰明の前に公開されてあつて、それを皇命と謂ふのである。釋迦が見開いた眞理は、必ず釋迦の手を経ねば分らぬと限られてはない、ニュートンも、ガリレオも、エヂソンも、其の思ひ思ひに科學上に貢献し、孔子も、老子も、孟軻も、亦各々道に感想を走せ得た所以は其處にある。馬鹿にナン細まつた、動物に近い思想は、幾万年過ぐるとも、少しも進歩はない、つまり進化論は人類其者には當嵌つても、動物には當嵌らないのはそれである。猿は幾千年経つても、依然として猿であるが、人は幾万年経つても、同一とは言ひ得ぬ點がある、同じ人間と言つても、能力の大小品格風貌の高下、何や彼と、限りなき差別のあるのが人間である。吾人は後藤子が復興院總裁として、社會より動物的思想を艾除し、人と謂ふ名辭に耻ぢない、眞文明を建設することを考慮に置かれ根本の問題を逸せぬやうに希望して止まないのである。

無智迷信は人生の害虫

今度も吾人が眼の邊り見もし、聞きもして居ることからに、何うしても歸一して統一して置かねばならぬ思想は、無智と迷信を一掃す可きことである、或者は淺草の觀音が焼け残つたことにつき、その御利益が大した者だと、譯もなく難有がる者があるに反し、或者は多年觀音を信仰して而も家は焼かれ親は死し、兒には離れたこと以て、無性に觀音を呪ふことである。要するに斯くの如きは觀音の焼残つたことが自己の生活と密接である輩は之を讀し無關係な者は不思議であると思ふ者と、當然と思ふ者となることに歸着して居る。之は一つ公明に判決を與へて見るが良い、觀音の残つたのは、樹木の在たこと、多くの人間が水を以て防いだこと、相當に空地があつたことも、焼け残つた原因の一つに數へることの出来るのは、同じ淺草で松浦伯の屋敷が、庭内に廣い池があつた爲に残り、小松侯邸が焼け落ちたやうに、別段位の高下や、徳望の如何よりも、地の理と風の吹廻しに對する、人々の努力が結果附けて居る

と思はれる。

力を以て唯一の權威と心得る、舊き思想には、無智と迷信がある、この思想が皇室中心主義に據る時は、日本をして軍國主義的、進路國に謬られるであらう。吾人の唱ふる皇命とは、中心を己が身に定めることで、その自己が正當な者でない以上は、如何なる者を昇いでも何んなに學問してもそれは決して正しいとは言はれない。佛教と言ひ、耶蘇教と謂ひ、若しくは天理教と謂ひ、又世の有ゆる主義主張は皆其の時と處とに應じて、必然的に叫ばれたもので、無意義な者は一つもなく、相當に世を益するものであり、正しく益して來て居るに相違ない。けれども、世界人類の平和を保持し、人類至善の幸福を計るには、領土の大小、人種の相違、宗教の異同を以て、待遇を異にし、差別を設けることの謬りであるやうに、今日は總て公明なる精神を以て事物に對し討究考査せねばならぬ時代である。吾人は恩義、恭謙、仁愛と謂つたやうなことがらを、たゞ盲目的に執着して、之に向つて必死の熱を注ぐ前に、一つ上の公明な者に眼を着けなければならぬ。徳川の臣が何處迄も、幕臣たることを威張り、足利の家來が飽迄その主家を立てやうとする心は忠義かも知れぬが、それでは我が萬乗の陛下は立たず、萬世一系の國是は保たれない。即ち世に水平運動の生ずるのも、そう言つた舊思想の祟りとも考へられるではないか、未だ理窟を抜きにし、吾人は事實の上に進むのである、善惡は知らぬが、徹頭徹尾やる丈けのことはやると謂ふ言葉には熱はあるけれど、明かに無智迷信を見逃して居る。理窟も可なり、事實も是なり、用ふ可きは用ひ、行ふ可きは行ひ、自然の公明なる世界の前に、その己れの最善を盡すあらば、熱す可きに熱し、冷視す可きに冷視し、克く其の己の天資を眞正に果たすことが出来ねばならぬ。

吾人は或時代に、或人種に或る個人が作れる、偏黨な宗教々祖や、道徳學者を、其の貫祿以上に金箔を附ける仕方を止めて、もつと自覺ある皇命教を樹立され度いのである。何故なれば目標が、種々あるやうでは、統一上に支障を來たすからである。人種の如きは直様之を同一にすることは出来ない。

ど、思想に關稅は課すことが出來ず、學問に國境のないやうに、皇命の思想を世界に宣傳擴張するに、何等の不合理を見出すことはないのである。若しそれ公明の心に醒めたらんには、萬國の交通し、高天原の古事に因みて降臨在す、我が皇上の徳が如斯く現されし時に、皇命の樹立されざる道理はない。然り我國の現在に神道と稱する宗教あれど、之れみな政府が一管長の私になすが儘にしてある状態下、一管長の智略徳望は、直に其の信徒の増減集散に影響する有様なるを以て、一教の盛衰は其の教義、綱領等とは丸切無關係である。政治家が惡辣なる策略を以て、請負師然たる中に、巧みに結び付きて、其の己を恣にするが如き、營業的宗教は天の道を説き、神の教となすに足りないものである。無智迷信を一掃するには教をなす者をして各省の上に位いせしめ、何處迄も、國民の敬愛掲仰に價す可き丈け、其の根本を清むるに在り、土木を起し輪喚の美をのみ興復するが如き、仕事師の頭にては、所詮今後の人心を支配するには充分と言はれぬ。吾人は豪傑内閣其者にも、無智迷信思想が蟠居して、知らず根幹に害蟲たるものあるを思はざるを得ない。

人格を尊み金錢を節せよ

人情風俗の頹廢、志氣の墮落は何ぞ、最も簡明に之を説けば、金をもつて居る人間が、その眞價以上に幅を利かして居る事である。未だ現在でも職工や、一般労働者階級には、何に彼奴は金があつても、學問もなく、人格もない者であると言つて、幾分か智徳を尊崇する心が残つて居るが、却て高等の教育を受けた、所謂紳士と言つた階級の人は、口には人格や、智識を説けど、心はもうたゞ金々々、金さへあれば良いと考へ、金を作り得る智識ある者を智者とし、賢明の人と心得て居る有様にて、レツテルが悪くてはならぬと、徒らに虚榮虚飾の風をなしつゝあるのである。之れは全く今日の政治が餘りに、物質的に組織されて人格的政治でない結果である。即ち古への君子、聖人と言つた、教化の人は脆くも乞

食坊主以下にこき落され、國の爲に戦つた軍人も厄介者にされんとして居り、世を擧げて滔々資本家全盛の氣圍氣に浸り、其の居室を豪壯にし、服裝を華美にせしめ、人心は荒み、不健全なる分子を製造して仕舞つた。

然らば如何にせば之れを救治し得るや、救世軍の仕事のやうに、困窮せる者に物を與へたりする間に合はせの糊付細工では、人心は救はれない、宜しく皇命官と言つたやうな、權威ある教化の官制を敷き、各省の上に置き、宮様又は高德の人才を其の總理となし、神官僧侶の官録を高め、各宗を開放し、解散して、統一ある教を樹立する根本方策を講ずることである。而して司法行政の監督をなすに在らざれば、司法は動もすれば三百代言的思想に侵害され、行政は金力的醜狀に支配されるものである。吾人は此の意味を諒解せしむる爲めに少しく人間禮智の根本に就き説かねばならぬ。

結 論

現代人心の動搖は、其の原因種々ありと雖も、その期する所は志氣の頹廢にありとせねばならぬ。若し人間がその希望を羅列する時には、其の位置に由り境遇に基いて、千態萬狀、それは怖らく無限であらう。生活費を得ると謂ふのにも、或者は僅かに三圓五圓の金に腐心し、或者は五百圓千圓の金に苦慮し、又或者は萬圓億圓の金に其の心を痛めて居る、皆各自は恰度其身に叶ふ丈けの不平を抱懐して居る筈である。して見ると人間が生きて行く上に於て、或る場合に恐怖を感じ、或場合に激昂し、或場合に悲喜するが如きは、萬人共通の心事にして、丈夫も亦涙なくんばあらずである。その智者も時に迷ひ、勇者も愚者に悖ることあるは、等しく無限の希望を以て、無限の生命を運びつゝあるからで、其の行動に殆んど無限の束縛があるからである。そして人間が限りなく不完全であることを證明して居る。轉近科學の進歩は驚く可き者があり、古人が考へも付かぬことを丸切り考へもなく行つて居る、天文

學者は天體の状態を研究して、殆んど無限の感想を之に當て餘め、大なる趣味の下に浸り、哲學者は宇宙の進展、その初發を回憶して遐々として遡る哉と嘆息して居る。そして怪し氣なる自信の下に、或者を妄想狂と呼び、迷信者と稱し、主義を唱へ、主張をなし、運動を起し、工夫を積み、考慮を恣にして居るが、實は明日の命も知らぬ憐む可き人間である。之れが爲め、千百の法文も、萬般の施設も、多くは空虛形骸の末に走り、眞實を逸失しつゝあるものである。吾人はたゞその眞實を得る一策として、先づその命なる者が絶對なるを自覺し、自己の心をして、その自覺の下に活用せしめねばならぬ。

多くの論客、主義者學者と謂ふ輩は、無限なる心量を體現せずして、有限なる智識に酔ひ、而もそれを衒ひつゝあつた、彼等は無上尊の頭を以て天下を議しつゝあるが、尙猿猴の月を窺ふの類ひである、彼等には信仰もなく、その奉仕すべき一人者がなく、彼等の恭敬は、人間互助の精神より上に出でず、手前勝手な氣風を脱して居ない。之れに反して、舊來の宗教家は、信仰はあり、順厚であり、情誼的ではあるが、餘りに偏窟である、その動もすれば名利の奴となり、道を穢しつゝある所以がある。彼等は權力の前に意苦地なく、舊套を脱するには餘りに愚痴な者である。

目醒めざる國民、囚はれたる人類をして、公明の心を涵養し、無信仰の主義者を自覺せしむるには、皇命官を置き、相當の國幣を積み、眞祿を附け、勳等を有する教官を養ひ、復興院を設けしが如き意氣込みにて、眞劍に眞理の研究を遂行せしめねばならぬ、世上傳ふるが如く、神祇官の復興の如きは、徒らに勿體を着けし、舊套の保存に過ぎずして、如斯は未だ以て、神聖を奉祀するの大義を悟らしむるに足りない、世界は決して神の世界ではない、眞人間の世界でなくてはならぬ、何となれば、人に於て始めて祭祀の禮あり、天津日嗣の天業があるからである。

更に眼を天に致せば、吾人は日月の懸れるを仰ぎ、地に陰陽あり、人に夫婦あり、禽獸に雌雄あるを知る事が出来るではないが、即ち夫婦とは恒常彝倫を尊む人に於て初めて存し、決して他の禽獸に在

ることなし、夫婦とは何ぞ、中介者あり、天地に形り、神前に誓ひたる典禮の異名にして、たゞ單に尻と尻とが交はると謂ふ動物とは別である。聞け！我が神武天皇の仁生川上に皇祖を祀り、疆原に即位の大典を擧げさせ玉ひしは、人間の至情より出づる者にして、具に恒常彝倫を示し、人類の基く可き道を教修し玉へるもの、決して、宗教家の講釋、勸説に由るものではない。中古諸種の宗教の作製されて、人間の自然なる至誠より出する恭謙奉祀の典禮をして、人爲的宗教の儀禮に捕へ、之れに由らざれば道を得難しとするの風をなすや、繁文雜理を掲げて自然の大道を謬るの嫌ありと雖も、其中又自ら人間としての一道の氣脈を失はなかつた。

古來神祇を敬し、皇室を尊ぶは、殆んど我國固有の國風の如く、竟に今日に及んで居る。それ皇命とは總ての和である、萬事萬物の總和である、和は輪に通ずれども、たゞその外廓のみを謂ふのではない、眞實を言ふものである。即ち我國は、和の國である、儒も入れ、佛も入れ、有ゆる思想を抱擁して更に餘す所がない、世界萬國、國廣しと雖も、此の顯幽一致、生死一貫の和教を有するものはない、吾人は空前の時局に臨み、明かにその古い聖人、君子、豪傑には、不完徳なるものあり、偏狹な者のあつたことを看破し、たゞ利之れ善しとする動物的行動者に對し、皇命の徳を傳へ、道教を示し、眞徳を發揮せしめねばならぬ。

あゝ現代の人よ、當局者よ、未だ根本に目醒めざるか、あゝ、震災後に處す可き國民の覺悟に、

大正十二年十一月廿八日印刷
大正十二年十二月一日發行

非賣品

未だ根本に目醒めざるか奥附

東京府荏原郡中目黒千番地
著作兼發行人 菅 沼 豊

東京府荏原郡中目黒千番地
發行所 皇 命 會 實 行 部

東京府荏原郡平塚村戸越五百五番地
印刷所 株式會社 行政學會印刷所

